

ヴォーン・ウィリアムズ：《命の家》

ヴォーン・ウィリアムズの連作歌曲集《命の家》は、1903～04年頃の作。ラファエル前派の画家で詩人のダンテ・ガブリエル・ロセッティのソネット集から6篇を選んで付曲した。

「Love-Sight（愛する人びと）」は、最愛の人を見る喜びと、いつかそれを失うかもしれない恐れを歌う。「Silent Noon（静かな真昼）」は、ロセッティの色彩感をヴォーン・ウィリアムズが見事に音化した傑作。夏の野原で寝そべっている二人に「時が静止したかのような永遠の瞬間」が訪れる。

「Love's Minstrels（恋を歌う吟遊詩人）」では、吟遊詩人の「豎琴」を模したピアノ伴奏が詩情を余す所なく伝える。「Heart's Haven（心の隠れ家）」は、愛がもたらす加護を讃える。「Death in Love（愛の死）」は、愛の絶頂に潜む「死」の影を見る。徐々に重くなっていく曲調が聴きどころ。

「Love's Last Gift（愛の形見）」では、愛のギフトが差し出されるが、第5曲と同じように音楽がフェードアウトしていき、穏やかに曲を閉じる。

A.マーラー：《5つの歌》より

グスタフ・マーラー夫人であったアルマは、ツェムリンスキーのもとで作曲を学んだ才女（ただし、マーラーの生前は作曲を禁じられていた）。《5つの歌》の出版は1924年。今回はその中から3曲をお届けする。

「Hymne（賛歌）」は、ノヴァーリスの詩を用いた雄篇。後期ロマン派特有の濃密な和声と不斷に揺れる旋律が、聖なる父への帰還と神秘的な合一を素描する。神との邂逅と昇天を歌う「Ekstase（恍惚）」は、O.J.ビーアバウムの詩。うねるような伴奏と跳躍する音楽が、あふれ出る官能を表現する。「Der Erkennende（識る人）」は、F.ヴェルフェルの哲学的な詩を用いた曲。表題は「何一つ自分のものにならない」ことを認識するという意味。

ワーグナー：《ヴェーゼンドンク歌曲集》

ワーグナーはスイスでの亡命時代、実業家でパトロンでもあったオットー・ヴェーゼンドンクの妻マティルデと衆目をはばかる関係を持った。それはやがて楽劇《トリスタンとイゾルデ》に昇華されるわけだが、そのマティルデの詩に付曲したのが《ヴェーゼンドンク歌曲集》。5つの歌には、叶わぬ思いをひたすら夢想する濃密な詩情があふれている。なお、本作は《トリスタンとイゾルデ》と同時期に作曲されたため、共通の楽想が聴取される。

ブリテン：《ジョン・ダンの神聖なソネット》

作曲されたのは1945年。ブリテンは、ヴァイオリニストのユーディ・メニューインとともにドイツへ渡り、解放直後のベルゲン・ベルゼン強制収容所で演奏を行なった。そこで目にした地獄絵図は、生涯消えることのないトラウマをブリテンに植え付けた。そして帰国直後、熱にうなされるよう書き上げたのが、全9曲からなる《ジョン・ダンの神聖なソネット》。ここでは、単なる宗教的な祈りではなく、「死、罪、そして神への根源的な問いかけ（あるいは怒り）」が音楽として示されている。ピーター・ピアーズによって1945年に初演されたが、高音域が容赦なく続き、強靭な声が要求される。